

27PA-am148

育苗期間を短縮したトウキ(*Angelica acutiloba*)の開発研究 - 栽培研究およびリグスチリドの定量分析 -

○酒井 悠太¹, 深谷 匡², 月岡 淳子², 中村 誠宏², 松岡 史郎¹, 菱田 敦之³, 川原 信夫³, 松田 久司² (¹武田薬品京都薬用植物園, ²京都薬大, ³医薬健栄研・薬植セ)

【緒言】トウキ (*Angelica acutiloba* Kitag.) の慣例法での作型は、4～5月に露地で播種して翌春まで育苗、その後に苗を本圃に定植して11～12月頃に収穫する。播種から収穫までの約1年8ヶ月間のうち約1年間を育苗に要することから、本研究では播種時期の検討により育苗期間の短縮を目指した。

【材料および方法】2015年4月16日および2015年9月18日より2016年2月18日まで1ヶ月毎にトレイに播種を行い、9、10、11、12、1および2月播種区とした。発芽後に3.5号ポリポットへ移植し4月まで最低15℃で加温育苗した。2016年4月26日に苗を本圃に定植して12月19日まで栽培して収穫した。1区10個体とし、定植時と収穫時に草丈、新鮮重等の生育調査を行った。地下部を自然乾燥させ、各区一部の個体について湯もみを行い、得られた各個体を素材として用いメタノール抽出エキスを作製し、HPLCによるトウキ主要成分リグスチリドの定量分析を行った。

【結果】定植時の新鮮重は播種が遅れるほど有意に軽くなった。収穫時の地下部の新鮮重は、9、10月の播種では4月の播種(慣例法)と同程度であったが、11月以降の播種では著しく軽くなった。一方、リグスチリドの定量分析の結果、9、10月の播種のトウキに含有するリグスチリドの含量が、4月の播種のものと比べ、同程度あるいは増加傾向であることが明らかになった。また、湯もみしたトウキにおいては、湯もみを行っていないものに比べリグスチリド含量が低下した。

【考察】本研究では、9または10月に播種して育苗した個体を栽培することで、収量、成分含量ともに慣例法と同等となった。このことから、従来の育苗期間を約半年間に短縮することが可能であると考えられる。